

# Newsletter 34

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第34号/2019年5月15日発行

## Contents

巻頭言	魔法の言葉
特集Ⅰ	基盤研究
特集Ⅱ	コレギウム・ムジクム、声楽クラスのカナダ遠征
特集Ⅲ	【教養研究センター設置科目】身体知・音楽／生命の教養学／身体知・映像／身体知／アカデミック・スキルズ／学習相談
特集Ⅳ	「情報の教養学」「研究の現場から」読書会「晴読雨読」
特集Ⅴ	「日吉行事企画委員会（HAPP）」「カドベヤ」「教養研究センター選書」
活動予定	4月～10月
私の〇〇自慢	



## 魔法の言葉

教養研究センター副所長  
荒金直人（理工学部）  
Naoto Arakane

2018年10月から教養研究センターの副所長になりました。経済学部の新島進さんの後任です。教セには1人の所長と3人の副所長がいます。所長は理工学部の小菅隼人さん、副所長は法学部の片山杜秀さん、文学部の高橋宣也さん、そして私です。任期は2年間ですが、私以外の所長・副所長は重任ですので、私だけが新入りです。教セの活動に関しては、まだよく理解していないことも少なくありませんが、徐々に経験を積んでいます。宜しくお願い致します。

これまで自分がどのように教セと関わってきたのか、改めて思い起こしてみると、いろいろな人とのいろいろな思い出があることに気づきます。2006年の新任教員歓迎会の場で法学部の横山千晶さんに所員になるように強く勧誘されたこと、なぜかまだよく覚えています。2007年と2008年の日吉キャンパス公開講座で講義をし、運営委員にもなったこと。最初は、当時経済学部におられた伊藤行雄さんに講義を依頼されたように記憶しています。運営委員長は経済学部の小淵昭夫さんでしたが、小淵さんは2008年の秋に亡くなりました。2009年に法学部の武藤浩史さんの実験授業に参

加させて頂き、議論をさせて頂いたこと、楽しい思い出です。その後留学などもあって少し間が空きましたが（あるいは記憶が抜けてしまっていますが）、帰国した2014年には、教職員対象の「研究の現場から」で、経済学部の鎌田由美子さんと二人で順番に発表をしました。同じ年には、当時文学部におられた納富信留さんからの依頼を受けて、日吉キャンパス公開講座で三回目の講義をしました。2017年度は、経済学部の工藤多香子さんの企画で、十回にわたって読書会を行いました。とても楽しい時間でした。2018年度は「生命の教養学」の企画委員長になり、11名の講演者の講義を学生と一緒に聞く機会を得ました。今回、教セの副所長になった関係で、2019年度は企画委員長を商学部の西尾宇広さんに引き継いでもらうことになりました。これら以外にも、「研究の現場から」や読書会には何度も参加させて頂きましたし、その他の講演会や演奏会にも参加させて頂いたことがあります。

このように振り返ってみると、教セでの活動はその都度、それ以外の機会ではなかなかお目にかかることの少ない他学部の先生方との、ふれあいの時間だったように思います。「教養」という言葉は、この日吉キャンパスにおいては、それを使うことでいろいろな人たちと繋がることのできる、魔法の言葉のように感じます。この魔法がいつまでも解けないように、微力ながら貢献したいと思います。



# 基盤研究

## 「教養研究」シンポジウムno.3 「クラシック音楽を“教養”から考える」

### クラシック音楽はいかにして生きた教養になりうるか

クラシック音楽を聴取する。あるいは演奏する。そうした行為は、西洋近代市民社会の中で「教養人のたしなみ」として広まり、日本にも入ってきたと思います。教養とクラシック音楽は不可分とさえ言えるでしょう。そこで、教養研究センター基盤研究「教養研究」シンポジウムno.3として「クラシック音楽を“教養”から考える」を、2018年10月6日、日吉キャンパス来往舎のシンポジウムスペースで開催しました。お招きしたのは、亀山郁夫さん（名古屋外国語大学学長）と平野啓一郎さん（小説家）。御二人とも、音楽的教養が仕事の核心にある。音楽をいかに教養とし、どうアウトプットと結びつけているのか。平野さんには「小説の中の音楽」、亀山さんには「私のショスタコフヴィチ」というお題で講演していただき、そのあとにご一緒のコーナーを設け、自由に深く対話していただきました。内容の詳細については、後日まとまる予定の刊行物でお読みいただければ幸いです。（片山杜秀）



## 講演会no.3 前田富士男氏 「大地の芸術学—庭園と建築を歩む」

寒さ厳しい中、2019年1月16日、来往舎シンポジウムスペースに於いて、前田富士男名誉教授による基盤研究講演会no.3「大地の芸術学—庭園と建築を歩む」が行われました。約30名の参加者を得て、充実した講義と活発な討議が行われました。前田先生は大学アートセンターの所長を務められ、近現代美術、特に、パウル・クレー研究においては日本での第一人者です。この講義では、芸術学の観点から、庭園と建築の思想に注目しつつ、教養が形成される「場」についての議論が行われました。すなわち、教養の本義が「自己形成 Bildung」にあるとすれば、その自己形成の拠り所を自然（Nature）に求めるのか人工（Art）に求めるのか、言い換えれば、教養を、田舎での瞑想生活（Vita contemplative）と都市での活動的生活（Vita active）の緊張関係の在り方の問題として前田先生は提起されました。先生の「ライブニッツの作った庭園に、18世紀のイギリス式風景庭園に、疑問符を付したゲーテの手になるイルム川公園に、いや、19世紀末に枯山水を真っ向から否定した七代植治による京都・無鄰菴に身をおこう。自然や大地の時間は、むしろこうした造形作品からこそ、立ち上がってくるにちがいない」というメッセージは、教養と芸術の関係について新しい見方を与えて下さいました。（小菅隼人）



## 文理接続プロジェクト 医学史と生命科学論

### 第1回「症例誌と文学と社会：医学と様式と歴史の複合」

教養研究センターの新しい文理接続プロジェクトである医学史と生命科学論の第1回の研究講演会が4月16日の夕刻に行われました。小菅隼人によるプロジェクトの説明、参加者による自己紹介の後、鈴木晃仁が精神病院の症例誌の分析について講演しました。患者カルテの分析で、科学技術系の意義と、社会・文化系の意義の双方が明らかにされ、患者個人の人格が提示される事例を紹介しました。文学、歴史、社会学、生物学、経済学から、鋭い質問があり、非常に活発な議論が展開されました。（鈴木晃仁）

## 未来先導基金プロジェクト

### コレギウム・ムジクム、声楽クラスのカナダ遠征 ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）との 共同演奏会

白寿生科学研究所寄附講座「身体知・音楽 I II」の履修生を中心とする慶應義塾大学コレギウム・ムジクム、アカデミー声楽アンサンブルが、カナダ、バンクーバーを訪問し、UBCのバロック・オーケストラと共同演奏会を開催しました。

参加したのは、学部1年から大学院生までの合計24名。3月2日に出発し、当地を代表するバロック音楽演奏の大家アレクサンダー・ヴァイマン氏の指導のもと、リハーサルを重ね、3月8日にUBCの学生、その指導者、地元出身の若手演奏家との合同ドイツ・バロック音楽の演奏会を実施しました。曲目は、ディートリッヒ・ブクステフーデの不朽の名作と言われた《メンブラ・イエーズ・ノストリ》などで、450席ほどのクライストチャーチ大聖堂はほぼ満席で、用意した

プログラムがなくなるほどでした。

今回支えてくださったのは、古楽復興NPO団体であるアーリー・ミュージック・バンクーバー（EMV）でした。同団体はUBCの古楽演奏教育プログラムを提供するほか、今回の演奏会の主催を務めてくださいました。また、慶應の学生はEMVのサポーターの家にホームステイもさせていただきました。

同地でのクライストチャーチ大聖堂および聖アンドリュー・アンド・ウェスレー教会での礼拝奉唱、日系社会奉仕NPOの「隣組」での演奏、バンクーバー三田会による歓迎行事での演奏も行いました。

さらに、今回のプログラムではいくつかの講演会による学びの時も持ちました。慶應からUBCへの交換留学生第一号で、カナダの外交官夫人として世界で活躍したコピソン矢飼珠子氏の講演では、音楽を学び演奏することは、歴史文化を知り、またそれを同時代の人々に伝え、人々と繋がることのできる、すなわち人生の縦軸と横軸の両方を自らの中に保つすばらしいことだということを学びました。その他、カナダへの日本人移民二世のゴードン角田さんからは、日本人移民の歴史とご自身の体験を学び、またEMVの代表のマシュー・ホワイト氏には、古楽の普及とカナダにおけるマネジメントのあり方についての話をしていただきました。

この音楽による交流活動を成功裡に終了できたのは、多くの支援者の方々の熱い思いがあったからだと感じます。熱狂的な思いを胸に、3月10日、学生全員無事に成田空港に降り立ちました。（佐藤望）



クライストチャーチ大聖堂での演奏3月3日



歓迎レセプションにて 右より コピソン矢飼珠子氏、佐藤望商学部教授、バンクーバー三田会長松本明子氏 3月5日



演奏会本番の様子（EMV提供、撮影：Jan Gates）3月8日

## 身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2018年度においては従来通り2つの授業が開講されました。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」です。これら授業は、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座となっています。2018年度秋学期においては、それぞれの授業において充実した教育が行われ、年度末に成果発表演奏会が行われています。器楽クラスでは、2019年1月20日に藤原洋記念ホールにおいて、「フランス音楽いつまでも、どこまでも」と題された演奏会が催され、地域住民を含めた多くの方々に来場していただきました。横浜市と提携されたイベントであるということもあり、慶應義塾の社会貢献活動の一環としてこの授業が広く認知されていることが確認できました。合唱クラスは今年度、慶應義塾未来先導基金の企画として、カナダへ赴き演奏会を開きました。これについては、別途報告されているので参照していただければ幸いです。

(石井明)

## 身体知・映像 総評

2018年度の身体知も最初が肝心でした。選抜試験です。限られた時間のなかで、数十名の履修希望者のなかから20名の受講生を選ぶことは半端なことではありません。オーディションの演技と受講希望書のアンケートの内容を精査し、議論することによって、20名を決定するのです。春学期は、例年通り、3つのグループに分かれて、オリジナルの脚本に基づいた短編映画の製作を行いました。秋学期は、原作のある短編に基づいた映画作品の製作が課題です。今年度は、実験的にわずか2ページ程度の超短編を使用して、学生の想像力を試しました。マイケル・オープンハイマーの「果物ナイフ」、ブルース・イアソンの「アパラチアン・トレイル」、ズドラフカ・エフティモファの「血」の3作です。横山千晶先生の翻訳を使い、合計4作の秀作が誕生しました。

一年間の学生たちの努力がこうして映像作品になっていくことの喜びを今年も分かち合うことができ、幸せでした。

(佐藤元状)

## 生命の教養学

2018年度の「生命の教養学」のテーマは「組織としての生命」でした。生命とは何か、組織とは何か、生命という概念と組織という概念はどのように関係するのか、という問題意識を導きの糸に、11の連続講演が行われました。講演者の専門分野を講演順に列挙すると、発生生物学、純粋数学、運動方法学、国際経営論、生命情報学、昆虫社会学、自然人類学、ドイツ文学、軍事関係史、西洋政治思想史、哲学となっています。多様な分野を横断しながらも、概ね、理系的ものから文系的なものへ徐々に移行する形を採っており、「生命」と「組織」についての理解が、分野を超えて拡大していくように配置されています。それぞれの講演が独自の仕方です。「組織」というものを解釈した上で「生命」を論じていますが、それらを通じて、「生命」を考えるための一つの方向が見えてきます。講義録は書籍として出版されますので、ぜひご覧ください。

(荒金直人)

## 身体知—自らの思い込みを変える夏

夏の身体知は、短い物語を声に出して読み、聞くことでどのような風景が見えてくるかを毎年体感する集中授業です。本年度も8月13日から18日までの6日間、22名の通学生と通信課程生がともに学び、刺激と感動を共有しました。今年度は「伝える」をテーマに、夏目漱石の「夢十夜」から「第一夜」、同じく夏目漱石の「永日小品」から「蛇」、そしてアイルランドの作家、エセル・ローハンの「どぶ」、アメリカの作家、ジョー・ミノの「月の成り立ち」の4作品を扱いました。授業は他者の朗読からインスピレーションを受け、ディスカッションをし、そこから自分の物語を作っていくという段階を踏んでいきます。また物語の世界を体感するために、ペアでのブラインドウォークや、絵による表現も授業の中に盛り込みました。文字の持つ力にあらためて気づくと、物語の新たな解釈がわいてきます。また他者の解釈が自分の解釈と全く異なる、ということを理解するのも、自らの思い込みを変える経験となります。そのようにして培われたアカデミック・コミュニティでは、新しい年を迎えてもまだ交流が続いています。来年度の夏もまた、新しい仲間に出会えるのを楽しみにしています。

(横山千晶)

# 教養研究センター設置科目



### 「日吉学」開講へ

2018年度の教養研究センター設置科目は、「アカデミック・スキルズ」の英語クラスが開講されなかったのが前年度と違うところでした。それから、2013年度より実験授業として行われてきた「日吉学」が、2018年度中に万端準備整い、2019年度から、株式会社コーエーテックモホールディングスの寄附講座として設置科目化されます。

2018年度の「アカデミック・スキルズ」は、論文作成とプレゼンテーションを行う3クラスを、水木金の各第5時限に開講しました。履修者が仕上げた論文は、年度末に刊行された授業成果を記録する論文集に掲載されています。内容は、文学、建築、人工知能、政治、民俗など、例年通り多岐にわたりました。履修者に自由な課題を掘り下げてもらう授業の性質からして当然ですが、2018年度の特徴としては、児童養護施設、奨学金、米軍基地、放射能汚染といった問題が扱われる傾向が目立ったことでしょうか。経済成長の減速、少子高齢化、貧富の格差の拡大、国際情勢の不安定化、災害の多発。現代の若い世代は不安に取り巻かれています。論題の傾向も1960年代くらいと似てきている面があるかもしれません。しかし、1960年代の負の問題はアンバランスな高度成長に伴う矛盾の痛みでしたが、今のそれはアンバランスな衰退に伴う痛みかとも思われます。年度末のコンペティションでは、論文部門の金賞を、辺野古の問題を扱った木曜クラスの松山泰斗さん（法学部政治学科1年）が、プレゼンテーション部門の金賞を、貧困世帯への教育費支援の問題を扱った笹川晶永さん（商学部1年）が、それぞれ獲得しました。



### 「知の探究」の出発点

アカデミック・スキルズが「知の探究」という言葉で説明されているのをよく耳にしますが、私にとって当講座は、探求の出発点でした。そう強く感じたのは、プレゼンテーション・コンペティションの場でした。自身が取り組んだテーマについて発表すると、学生から鋭い指摘が出ました。指摘を受けると、もう一度考え、調べなおさなくてはいけない、そんな思いに駆られ、再び知の探究が始まろうとしていました。あたたかく見守ってくださる先生方、同年代でありながらたくさんの刺激をくれる学生たちに囲まれ、受講した1年間はあっという間に過ぎてしまったように思います。しかし、振り返ってみれば、大変充実した毎日でした。これからも調べる、考える、議論する、そしてまた調べる、この果てしない知の探究を続けていこうと思います。

(商学部1年 笹川晶永)

### アカデミック・スキルズを振り返って

この度、論文部門において金賞、プレゼンテーション部門において銀賞を受賞させていただいたことは身に余る光栄です。大変丁寧なご指導をいただいた先生方、1年間共に切磋琢磨しあったクラスメートの皆さん、ご協力いただいた教養研究センターの皆様様に心から感謝しています。本当にありがとうございました。論文の提出期限に追われる日々から解放された今、どこか寂しさを感じています。疑問に感じたことをとことん調べ、考え、想いを伝える。アカデミックスキルズで過ごしたこの1年間で私は、大学生活における強靱なアドバンテージを得ることが出来たと確信しています。今回のこの結果に満足することなく、残り3年の大学生活を直向きに頑張りたいです。

(法学部1年 松山泰斗)

### コンペティション入賞者一覧

#### ■論文部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	水	法・2	梅崎 瑞希	日本の離婚制度と児童福祉—離婚後の家族の幸せを選択できる社会の実現に向けて—
金	木	法・1	松山 泰斗	辺野古新基地建設反対運動ではなぜ「歌」が歌われるのか
銀	木	文・1	星野 琉	大学ボランティアセンターのあるべき姿—ボランティアセンターがない慶應義塾大学を例に考える—
銀	木	経・1	宮田 信	アニメファンを中心とする缶バッジ人気の要因は何か—アニメ産業の動向との関連—
審査員特別奨励賞	水	法・1	竹田 有希	学力向上を目的とした部活動の適正化

#### ■プレゼンテーション部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	水	商・1	笹川 晶永	貧困世帯の大学等進学率向上に向けた奨学金制度拡充及びその費用対効果
銀	木	法・1	松山 泰斗	辺野古新基地建設反対運動ではなぜ歌が歌われるのか
銅	水	経・1	平野 慶太	児童養護施設の現状と自立支援の取り組みについて

### 学習相談ニューズレター 悩みを聞く姿勢

後期の学習相談では、授業内レポートに関する相談が主に寄せられました。それ以外には、日々の勉強の悩みなどの相談もありました。こういった相談のときは、私たちも同じような悩みを持っていることを相談者に伝え、一人ではないという安心感を与えられるように心がけています。このような対応が、さらに相談しやすい空気をつくると私は考えています。以上のように、学習相談に寄せられる相談のほとんどは私たち、ピアメンターも悩んだことのあるものばかりです。私たちは、同じ学生であることを生かし、相談者に寄り添って悩みを聞き、次のステップへ進む手伝いができるようにと考えて活動しています。相談前は気難しい顔でも、終わったあとは笑顔が出るような学習相談にしたいと思っています。

(理工学部2年 松尾佳奈)

※学年は2018年度のもの

## 情報の教養学

### 秋学期の講演を振り返って

2018年度秋学期の「情報の教養学」では、情報に関わる技術に注目した講演3件を開催しました。まず、Google合同会社のソフトウェアエンジニアにより、エンジニアという職種の紹介とともに、大学の授業がどう就職後に役立つかについて講演されました。次に、岡田美智男氏（豊橋技術科学大学教授）は、何かをきちんと行える通常のロボットに対する発想とは真逆にとらえた「弱いロボット」をテーマに講演されました。ここでは、ロボットが“できない”ことを通じて、人間との新たなコミュニケーションが生まれる様子を議論しました。最後に、小池康博氏（理工学部教授）は、フォトニクスポリマーという素材とそれのディスプレイへの応用を講演されました。純粋な技術の話で終えず、イノベーションが生まれる話やビジネスにつなげる話など、盛りだくさんな講演でした。いずれの講演も、中心は技術ではあるものの、授業の重要性、研究における心構えなど、一人前の技術者となるために非常に参考になるものでした。2019年度も、情報の教養学の講演を春・秋3件ずつ開催する予定です。（高田眞吾）



### 【情報の教養学】

#### 2019年度春学期スケジュール

第1回「サークルの、講義の、研究活動の、そして情報社会で生き抜くための、100万人の「肖像権」90分講座どこまで出せる？どこからNG」

講師：福井 健策（弁護士）  
4月24日（水）18：15～19：45 来往舎 シンポジウムスペース

第2回「インテリジェンスにおける教養の意味」

講師：佐藤 優（作家、元外務省主任分析官、同志社大学神学部客員教授）  
5月8日（水）18：15～19：45 来往舎 シンポジウムスペース

第3回 タイトル未定

講師：神武 直彦（システムデザイン・マネジメント研究科教授）  
6月5日（水）18：15～19：45 来往舎 シンポジウムスペース

## 「研究の現場から」

### 第24回 “November 1918” とアルフレート・デーブリン

デーブリンは、マン、カフカ、ムージルと並び、ドイツの文学モデルネを代表する小説家として一定の評価を得ています。しかし、他の大スターたちと比べると読者はそう多くありません。代表作『ベルリン・アレクサンダー広場』がワイマール文学の金字塔として称賛され、二度も映画化されているとしても、研究者らが認める通り、ドイツ文学史のカノンからは程遠い作家です。これはなぜなのか？ あらためてそんなことを考えながら現場に臨みました。まずは「ドイツ文学界の殿堂入りを免れている」（グラス）、「天才的狂乱者」（ラニツキ）といったデーブリン評を参照しながら、戦後のドイツ文学界におけるデーブリンの立場を再検討し、それから、11月革命100周年にちなみ、小説『November 1918—あるドイツ革命』の抜粋を読みました。時間や空間を自在に操りながら物事の細部に迫る独特の語りや文体について、皆さんと議論ができたことは大きな収穫です。貴重な機会を与您いただき、ありがとうございました。[2018年12月12日（水）開催]（糸田文）

### 【予告】第25回「研究の現場から」

2019年6月19日（水）18：15～来往舎101  
見上公一（理工学部）  
「研究の研究：自然科学と社会科学の協働を目指して」

## 読書会「晴読雨読」 『論語』『日本政治思想史研究』

### 庄内から荻生徂徠、そして丸山眞男へ

教養研究センターでは毎夏、庄内セミナーを催し、ここでは、庄内藩の旧藩校、致道館での『論語』の素読をするのが恒例となっています。庄内藩の儒学は荻生徂徠を祖とする徂徠学の系統に属し、『論語』の読み下し方も、徂徠学の独特な仕方が受け継がれ、それはポピュラーな読み下し方とは少し違うのです。その違いは何を意味するか。そのあたりの知見を関係者と共有したいということで、教養研究センター主催読書会「晴読雨読」の一環として『『論語』は日本でどう読まれてきたか』を2018年10月24日と11月13日に開催しました。『論語』の主要箇所についての徂徠の解釈を主題としました。さらに、徂徠の思想の意味を掘り下げるために、丸山眞男の『日本政治思想史研究』の読書会を始めました。2018年度内に12月26日、1月31日、2月14日の3回開催し、2019年度に継続します。（片山杜秀）

## 日吉行事委員会(HAPP)

### 秋学期のHAPPの活動

2018年度秋学期において慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会（以下HAPP）は、これまでと同様、春学期中に公募を行い、審査を経て採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開しました。今年度採択された公募企画は、教員企画3件、学生企画が1件でした。これらは、9月末に行われた、現代のメキシコを紹介する映画上映およびインスタレーション展示、10月に行われた、薩摩琵琶についての講演およびこれを用いた演奏会、女性の働き方などを学生の間で集まり考えていくという企画、そして国連UNHCR難民映画祭の学校パートナーズとして慶應が参加したイベントとなった、〈難民映画祭@慶應〉でした。いずれも活気のある催しものとなり、地域住民を含むたくさんの来場者にお越しいただきました。HAPPの活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できました。

HAPPの活動については、Webサイト  
<http://www.hc.cc.keio.ac.jp/happ/>をご覧ください。（石井明）

### 【HAPP】2019年度新入生歓迎行事一覧

「犬丸治講演会『平成歌舞伎を振り返る 歌舞伎よもやま話』」  
4月6日（土）15：00～17：00 来往舎 シンポジウムスペース

「上杉満代+曾我傑+多田正美による舞踏公演」  
5月24日（金）18：30～来往舎 イベントテラス

「ライブラリーコンサート2019春in日吉」  
5月24日（金）・31日（金）  
日吉メディアセンター 1階ラウンジ、地下1階AVホール

「桂吉坊にきく藝—古典芸能の中の落語—（ことばの世界Ⅴ）」  
5月29日（水）18：15～ 来往舎 シンポジウムスペース

「吉増剛造 後輩たちに語る —慶應義塾のこと、新作映画『幻を見るひと 京都の吉増剛造』のことなど—」  
5月30日（木）16：30～18：30 高等学校 日吉協育ホール

「日吉音楽祭2019」  
7月6日（土）・13日（土）・10月5日（土）  
協生館 藤原洋記念ホール

「日吉の森を歩こう～体育会との触れ合い～」  
未定 日吉の森、教室（未定）

「出雲大社の建築から考えるSHINTO（仮）」  
10月26日（土）15：00～ 来往舎 シンポジウムスペース

## カドベヤ

### 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」の10年間

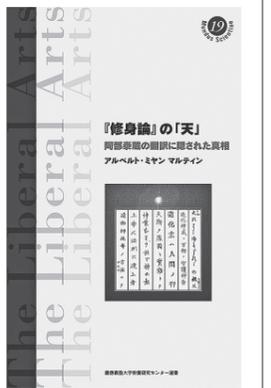
居場所「カドベヤ」の構想が立ち上がったのは、今からちょうど10年前の秋。教養研究センターは文部科学省の助成金を獲得し、今まで取り組んできた身体知教育を基盤として、高度な言語力を学生たちが身につける教育モデルを形成する教育研究事業を開始しました。2009年の秋のことです。その事業の一環として、学生と教職員が一時的なフィールドワークではなく、時間をかけてある地域の人々と場所から学ぶ拠点としてオルタナティブスペース「カドベヤ」が設立されたのは、多くの生活保護受給者が暮らす福祉の町、石川町の寿地区でした。カドベヤは、学生を含む多くの人々が言語ではない芸術的な表現でコミュニティを作り、やがてそこから言葉による交流を促す拠点となりました。同時に試行錯誤の上、毎週火曜日の夕方に「心身を動かすこと」と「共に食べることを2本の柱とした「居場所」が開催されることとなりました。居場所「カドベヤで過ごす火曜日」が立ち上がったのは2010年6月のことです。構想から10年、居場所開所から9年。本当に多くの人々に支えてもらいました。

そのカドベヤの事業はこの3月をもって教養研究センターを卒業することになりました。とはいえ、いつものように火曜日にカドベヤの扉は開きます。10年間の支援に心から感謝すると同時に、これからも変わりなく見守っていただけるように皆様をお願いいたします。本当に今までありがとうございました。（横山千晶）

### 教養研究センター選書19

#### 『『修身論』の「天」：阿部泰蔵の翻訳に隠された真相』

この選書は、筆者の博士論文の一部を発展させた上で要点をまとめたものです。タイトルの『修身論』は、明治初期の近代的な小学校で使われた文部省推薦の翻訳教科書です。文明開化の影響を受けた新教育制度の授業の他に、一般社会でも広く読まれ、大成功を収めた作品です。原書は、アメリカ経済学者F・ウェーランドによる道徳・倫理の論考で、若い時の福沢諭吉の思想にも大影響を与えました。記者は、当時文部省勤務の阿部泰蔵（福沢の門下生・明治生命創業者）で、キリスト教的な内容を翻案する方針の一環としてGodを「天」に置き換え、日本の伝統的な概念に頼りながら西洋的な近代国家の倫理観を日本の民衆に教えようとしていました。本書の中で、日米両国の思想・歴史的背景を踏まえ、近代日本の教育史と翻訳史の一端を明らかにするために、『修身論』の翻訳に隠された真相に迫ります。（ミヤン・マルティン、アルベルト）



- 【HAPP】犬丸治講演会「平成歌舞伎を振り返る  
歌舞伎よもやま話」**  
4月6日(土) 15:00~17:00、来往舎 シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】第1回：福井健策  
「サークルの、講義の、研究活動の、そして情報社会で  
生き抜くための、100万人の「肖像権」90分講座  
どこまで出せる？どこからNG」**  
4月24日(水) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】第2回：佐藤優  
「インテリジェンスにおける教養の意味」**  
5月8日(水) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】シンポジウム  
「北朝鮮とどう向き合うか」**  
5月15日(水) 18:10~19:30、来往舎 シンポジウムスペース
- 【HAPP】ライブラリーコンサート2019春 in 日吉**  
5月24日(金)、31日(金)  
日吉メディアセンター1階ラウンジ、地下1階AVホール
- 【HAPP】吉増剛造 後輩たちに語る一慶應義塾のこと、  
新作映画「幻を見るひと 京都の吉増剛造」のことなどー**  
5月30日(木) 16:30~18:30、高等学校 日吉協育ホール
- 【情報の教養学】第3回：神武直彦**  
6月5日(水) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】  
日本口レネス協会第50回大会**  
6月8日(土)~9日(日)、来往舎 中会議室
- 【研究の現場から】第25回：見上公一  
「研究の研究：自然科学と社会科学の協働を目指して」**  
6月19日(水) 18:15~、来往舎101
- 【HAPP】日吉音楽祭2019**  
7月6日(土)、13日(土)、10月5日(土)、協生館藤原洋記念ホール
- 【HAPP】日吉の森を歩こう~体育会との触れ合い~**  
未定、日吉の森、教室(未定)
- 2019年度「庄内セミナー」**  
8月29日(木)~9月1日(日)、山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)
- 【HAPP】出雲大社の建築から考えるSHINTO(仮)**  
10月26日(土) 15:00~、来往舎 シンポジウムスペース

4月

5月

6月

7月

8月

10月

- 【基盤研究】文理接続プロジェクト研究会「医学史と生  
命科学論」第1回：鈴木晃仁  
症例誌と医学と文学と社会：情報と様式と歴史の複合**  
4月16日(火) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【基盤研究】文理接続プロジェクト研究会「医学史と生  
命科学論」第2回：荒金直人  
ラトゥールの科学論と「物の歴史性」を非還元性の原則から捉え直す**  
5月21日(火) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【HAPP】上杉満代+曾我傑+多田正美による舞踏講演**  
5月24日(金) 18:30~、来往舎 イベントテラス
- 【学会・ワークショップ等開催支援】  
ワークショップ「日本における西洋古典受容」  
Receptions of Greco-Roman Classics in Japan**  
5月25日(土) 10:00~17:50、来往舎 大会議室
- 【HAPP】桂吉坊にきく藝  
ー古典芸能の中の落語ー(ことばの世界V)**  
5月29日(水) 18:15~、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】  
セミナー「幸せの国ブータン：その政治と社会」**  
6月14日(金)、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】  
日本エミリア・ディキンソン学会第34大会**  
6月15日(土)、来往舎 シンポジウムスペース
- 【基盤研究】文理接続プロジェクト研究会  
「医学史と生命科学論」第3回：松浦 広明  
Pursuing Global Health : Where Medicine Meets Social  
Science, Humanities, and Engineering  
鈴木晃仁  
Psychiatry and Transboundary Anxiety in Modern Japan**  
6月25日(火) 18:15~19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援制度】  
秋学期開催分募集申込締切**  
7月19日(金)
- 【教養研究センター選書 原稿募集】**  
申込締切日：7月26日(金) 原稿提出締切日：9月27日(金)

## 私の(身内)自慢

自慢というと憚られるが、身内の話をするをお許しいただきたい。関東大震災の年に北海道に生まれた義祖父は、大学進学を機に上京し、できたばかりの藤原工業大学に入學した。周知のように「製紙王」藤原銀次郎が私財を投じて開校した現理工学部だ。銀杏並木の銀杏の木もずいぶん低かったと聞く。理系の学生は学徒出陣を免れたが、いくども空襲をくぐり抜けたらしい。戦後、藤原の勧めで北海道に戻り炭坑会社に勤める。坑夫たちとの労働争議、石炭産業全体の終焉にともなう撤退……黄色いハンカチのはためいた昭和の北海道で勤めあげた。定年後タバコをやめ、囲碁や書はもちろん、海外旅行にも足繁く出かけ、第三の生を謳歌している。その顔つきは、「老後」というものがどうあるべきかを物語っているかのようだ。昭和と平成を生き抜いたその人生は、20世紀の日本がいかなるものだったのかを思い起こさせてくれるとともに、今応対している学生たちの数十年後のことをふと考えさせてもくれる。そんな義祖父も先日95歳を迎えた。義祖父とともに、そしていつも彼と一緒にいた義祖母とともに、新しい時代を迎えられることは、ただただ僥倖である。(商学部 渡名喜庸哲)



Newsletter  
May, 2019. No.34

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)

発行日：2019年5月15日 代表：小菅単人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/